

●春日部市民文化講座（第38回） 「茶の湯の道具の話し」

◆日時：2022年2月4日(金) 11時（ぼぼら春日部4階会議室）～12時

■茶の湯の道具の話し

皆さんもご存じのとおり、12世紀に中国から禅宗のお坊さんがお茶とお茶の木を持って来てくれて、万能薬として広めていったのです。ぼくも、京都のお寺に行ってお茶をいただきながら、伝来の話を聞いたことがあります。奈良のあるお寺では、人が抱えても持ちきれないほどの大きなお茶碗を作らせて、それでお薄を点でて、周りの人たちが支えながら飲むという所がありますが、それも、昔からの薬としての喫茶の習慣を継承しているのですね。13世紀になると武家が、そうした喫茶の習慣を取り入れるようになって、15世紀になると将軍や上層階級の人たちが喫茶をおこなうようになるのですね。この頃になると、喫茶が遊び、賭け事になるのです。どこで作ったお茶かという、産地を当てるといふ遊びになるのです。それも凄い金品を賭けた遊びだったようですね。こうして喫茶が始まったのですが、当時使われていた物は、中国から伝来してきた「唐物(からもの)」が良いと思われていたのです。こうした物が仏具と一緒に入ってきていますから、最初の頃は仏壇に飾るような三つ揃いだとか、五つ揃いだとかの物を茶道具として使っていたのです。今でも、ぼくたちが使っている建水なんかは、仏教の線香を立てる器ですよ。それでも、当時は中国から伝来した物でなければ、喫茶の道具には使わないという日本人の美意識というか、プライドというか、面白い感性ですね。それがずうっと現代にまで伝わってきているのですね。これを「唐物数寄(すき)」というのですが、そういう趣向が興りました。「数寄」というのは好き嫌いの「好き」の当て字ですけどもね。

■ I 唐物数寄

13世紀から15世紀までの中国は、南宋、玄、明という王朝が栄えており、明前期時代まで日本は貿易でさまざまな物を取り入れていきます。絵画、墨跡、磁器、茶入れ、茶壺、香炉、花瓶などの工芸品が中国から渡ってきます。こういう品をまとめて「唐物」と呼んだのですね。そうした「唐物」が使われたということが「君台観左右帳記(くんだいかんそうちようき)」という書物に記録されています。これは、室町時代の座敷飾りの秘伝書で、足利義政の同朋衆であった能阿弥が書いたと言われています。レジュメに戻っていただくと、「青磁茶碗で — 馬蝗絆(ばこうはん)」とありますが、これは「唐物」の中でも最上級の品ですね。今は東京国立博物館にあります。足利義政が所有したときに、底にひび割れがあったので中国に送って修理してもらったところ、直しようがないというので銚(かすがい)を打って止めて送り返されたという凄いな茶碗です。このお茶碗は青磁の中心、唐物の中心にある茶碗で、見る価値がありますね。牧谿(もつけい)の絵も大変珍重されて、本物が見られる機会は展覧会以外ではないと思いますね。このように、室町時代までは中国の品物が「唐物」として好まれていたということです。

春日部市民文化講座 2022年2月4日

「茶の湯の道具の話し」

はじめに

12世紀、禅僧により中国から喫茶の習慣が始まる。13世紀後期には武家が遊興として好む。15世紀には、将軍や上層階級によって日常的に喫茶が行われる。この頃は、「唐物数寄」が喫茶道義の基調となる。桃山時代には、茶の世界に新しい美しさが生まれ「唐物数寄」から「侘び数寄」の様相は日本文化に大きな影響を与えた。

I 唐物数寄

13世紀から15世紀までの南宋、玄、明代前期の絵画、墨跡、磁器、茶入れ、茶壺、香炉、花瓶など工芸全般にわたり唐物を好む。「君代観左右帳記」は、唐物好みをまとめている。青磁茶碗「馬蝗絆」、龍泉窯、牧谿などの中国絵画。

II 侘び数寄

1. 村田珠光により侘び数寄は始まったとされる足利義政 — 東山山莊東求堂「同仁齋」4畳半の炉が開かれた書院。主客対座する茶の湯座敷の始まりとされている。村田珠光は一休宗純から侘茶数寄の禅風を学ぶ。唐物風の茶器が瀬戸などで焼かれるようになる。

2. 武野紹鷗

堺、京都、奈良の町衆による侘び数寄が盛んになる。天文年間(1532-55)侘茶風の道具が明確になる。和物、高麗茶碗など、侘茶道具が多様化する。今焼き茶碗、瀬戸茶碗のほか、利休好みの今焼き長次郎の楽茶碗の他、美濃、瀬戸黒、志野が脚光を浴びる。備前、信楽、伊賀も新しい造詣観による茶具が作られるようになる。

III 利休没後の時代の先立ち、古田織部

利休七哲、古田織部は、秀吉による小田原攻めで千利休から伊豆菰山の竹で作った花入れとともに書状が与えられている。利休と織部の近しさを物語っている。利休没後は古田織部好みの道具が浸透するが、織部については謎が深く、今だに明確ではない。古田織部はキリシタンか、これは大きな謎となっている。織部の弟子、本阿弥光悦は、楽焼と同じ手捏で茶碗を作るが、利休好みの長次郎と異なることは、個性的な造形美の作風にある。

結び

過ぎたるは — 侘茶を遠ざける

■ II 侘び数寄 1. 村田珠光により侘び数寄は始まったとされる

15世紀までは「唐物数寄」が中心になっていたのですが、それがやがて「侘び数寄」になっていくのです。この「侘び」という言葉も分かりにくいもので、難しいです。でも「侘び」を文化としたのが日本人なのですね。そして、「侘び」を大切にしながら「唐物」も否定しないのが日本文化なのですね。将軍や上層階級が「唐物数寄」と言っている頃に、「土の陶器も良いよね」と言い出した人たちがいたのです。そうした中で出てくるのが村田珠光です。この村田珠光についてはいろいろと研究しますが、ぼくにも良く分からないのです。ですが、足利義政が造った東山山荘東求堂、銀閣寺にある4畳半の書院「同仁齋」には畳を上げると炉が切っただけなのですね。突然、書院の間に炉が出現したのかという謎に対して、ぼくは村田珠光が関係しているのではないかと思います。村田珠光は、誰からそういった思想を学んだかという、有名な一休宗純という禅僧ですね。ぼくは一休禅師の思想を受けて、村田珠光が「侘茶」の精神を学んだと考えていますが、これを裏付ける証拠は残念ながら学問的にはありません。ただ、江戸時代になって千家家が家元制度を確立して、さまざまな本を出す中で、一休禅師から村田珠光が禅の教えを受けて「侘茶」を考案したという話があり、村田珠光が出てきて「侘び数寄」という感性が生まれてきたのです。

■ II 侘び数寄 2. 武野紹鷗

村田珠光の次が武野紹鷗です。武野紹鷗が「侘茶」に影響を与えたかという、「応仁の乱」以降の京都は焼け野原だったのです。金持ちは奈良や堺に逃げたので、京都には金持ちがいなくなりました。武野紹鷗は奈良の出身で、やがて京都で暮らし始めて連歌を学び、その後、堺で暮らしているのですが、堺に疎開したのでしょ。そして、堺で茶の湯を教え始めるのですが、武野紹鷗の屋敷と千利休の屋敷は非常に近いのです。それで千利休が武野紹鷗の弟子であるということは間違いなくて、武野紹鷗は四畳半で茶の湯を教えていました。そして、武野紹鷗が千利休に与えた「侘茶」の影響は大きいと思います。堺の人たちも含めて町衆がお金を持つようになって、上層階級の人たちがやっていた「唐物文化」が町人の人たちに波及し、さらに「侘びの文化」も善しとしながら伝搬していくのです。その中で光輝いたのが武野紹鷗であり、その弟子の千利休だったのです。

■ III 利休没後の時代の先立ち、古田織部



「侘茶」の系譜は、村田珠光、武野紹鷗、千利休、そして古田織部なのです。千利休の没後は、古田織部が何と言っても凄かったのです。今でも焼き物で、作家の名前が付いていて知らない人がいないというのは、この人ぐらいでしょう。「織部焼き」の織部ですよ。どれだけ凄いかというと学べば学ぶほどに凄い人だと思います。ただ、千利休の死も謎でしたが、古田織部の死も謎なのです。何で彼が徳川幕府から切腹を命じられたかが分からないのです。ここで利休七哲についてお話しますが、「利休七哲」を最初に挙げたのが、利休さんから3代後の江岑宗左という表千家の家元です。利休さんの子の少庵の子・宗旦の息子ですね。その江岑宗左が宗旦から聞いたこととして書いた「江岑夏書」の中で7人の弟子を挙げているのです。一番最初が蒲生氏郷です。この人は、利休が切腹して千家が断絶になった時に、少庵を会津に匿い、その後、家康とともに秀吉の許しを得て、少庵を京都に呼び戻して御家再興を成し遂げさせた人ですから一番というのは分かります。次が高山右近、次に細川三斎、芝山監物、瀬田掃部、牧村兵部とキリシタン大名が並んで最後に古田織部を挙げているのです。しかも「織部は、この7人のうち一番茶の湯の才能がなかったが、後に天下一宗匠になった」と書いているのです。これは江岑宗左が古田織部を助けるために書いたと思うのです。このお話は次の機会にします。

「侘茶」の系譜は、村田珠光、武野紹鷗、千利休、そして古田織部なのです。千利休の没後は、古田織部が何と言っても凄かったのです。今でも焼き物で、作家の名前が付いていて知らない人がいないというのは、この人ぐらいでしょう。「織部焼き」の織部ですよ。どれだけ凄いかというと学べば学ぶほどに凄い人だと思います。ただ、千利休の死も謎でしたが、古田織部の死も謎なのです。何で彼が徳川幕府から切腹を命じられたかが分からないのです。ここで利休七哲についてお話しますが、「利休七哲」を最初に挙げたのが、利休さんから3代後の江岑宗左という表千家の家元です。利休さんの子の少庵の子・宗旦の息子ですね。その江岑宗左が宗旦から聞いたこととして書いた「江岑夏書」の中で7人の弟子を挙げているのです。一番最初が蒲生氏郷です。この人は、利休が切腹して千家が断絶になった時に、少庵を会津に匿い、その後、家康とともに秀吉の許しを得て、少庵を京都に呼び戻して御家再興を成し遂げさせた人ですから一番というのは分かります。次が高山右近、次に細川三斎、芝山監物、瀬田掃部、牧村兵部とキリシタン大名が並んで最後に古田織部を挙げているのです。しかも「織部は、この7人のうち一番茶の湯の才能がなかったが、後に天下一宗匠になった」と書いているのです。これは江岑宗左が古田織部を助けるために書いたと思うのです。このお話は次の機会にします。

■ 結び「過ぎたるは — 侘茶を遠ざける」

今日はぼくが持っている3つの茶碗を持って来ました。向かって左が川喜田半泥子さんの「柿のへた」、真ん中が織部釉をたっぷり掛けて立派な桐箱に入り箱書きまでであったもの、右は古田織部を研究されている辻村史郎さんが



「やっぱり織部はキリシタンとしか言いようがない」とおっしゃってぼくのために作ってくださったものです。皆さんはどれが良いと思われますか。結びに書きましたが、「過ぎたるは侘茶を遠ざける、殺す」と言いたいのです。これでもかといろいろな技法を使い釉薬をたっぷり掛けて桐箱に入れて箱書きまで付けたものよりも、箱がなくても作家が2万個も作った中の一つで素朴な「柿のへた」をぼくは毎日使っています。そして、織部を研究して作ってくださった辻村さんの心はぼくの心と一緒に。「侘茶の道具」は、使う者自身の資質、向き合う心が問われているのです。

「侘茶の道具とは、使う者自身の資質、向き合う者の心が問われている」との高橋先生のご指摘がグサリときます！